

今日も第一管理世界ミッドチルダの首都、クラナガンは猛暑であった。夏場の強烈な陽光に加え、都市の建物から発せられる熱が、この容赦ない酷暑を作り出しているのだった。フェイト・テストロツサ・ハラオウンは車内の冷房の温度を確認した。もう一度上げようかと迷った。外に出ると当然暑いが、こうやって車内で待機していると逆に寒く感じられる。

「実行犯は、確保失敗？ 既に逃亡済み？ ああっ、もう！」

隣の運転席に坐すわっているティアナ・ランスターが悪態をついた。

「逃げ足が早いね」

「どうしますか、フェイトさん？」

「もう一人の被疑者のほうは？」

「今、確認中です」

フェイトもティアナも管理局本局の次元航行部所属の執務官である。ただ、フェイトは違法技術関連の捜査担当、ティアナは凶悪犯罪担当であり、本来一緒に働くことはほとん

どなり。

違法技術関連をしのぎとしているマフィアの仲間割れだった。裏切りをしたとされる二人の構成員が、仲間制裁されたということで、フェイトとティアナとはこうやって一緒に動いているのだ。

「運が良いですね。こちらのほうに向かってきます。後、三十秒で現れます」

指示役とされる容疑者の逃走車が、フェイト達が網を張っているところまで来るといふ。その報告を聞いたフェイトは満足げに頷いた。

その車はティアナの予告通りに姿を現した。

「警告を入れて」

「管理局です。前方の赤い車、ただちに停止してください」と拡声器を通じて警告した。しかし、停まる気配はないので、ティアナは再度警告を放った。容疑者の車はさらに速度を上げた。

「ハイウェイに入るつもりですよ」

「そっちのほうが都合がいい。警告射撃を入れるね」

フェイトはサイドウィンドウを開いた。風が入り込んで、彼女の金髪を大きく揺らす。彼女の手のひらの上に、金色の光弾が生成された。フォトンランサーと呼ばれる射撃魔法だ。彼女の魔力特性で帯電しており、時折スパークを放っている。

「ファイヤ！」

それは手のひらから離れて、車外に出て行き軽やかに犯人の車に向かっていく。当たりそうになったところで、

「クリア！」

爆竹のように爆ぜて白い煙が出たが、それはすぐに後続の車にかき乱される。

しかし、それでも車は停まることなく、さらにスピードを上げた。

「完全に停まる気はありません」

容疑者の赤い車はクラナガン・ハイウェイの中央線へのランプに入る。

「そのまま、入ってくれる？」

「了解です」

ティアナがアクセルを踏み込むと、モーターが華麗な歌声を上げた。

「じゃあ、行くね」

フェイトはドアを開け放った。運転支援AIが警告を放ったが二人とも気にする素振りを見せない。

「気をつけてください」

彼女は車から飛び降りた。事情を知らぬ人間から見れば、それは単なる自殺である。刹那、フェイトの身体が光に覆われた。執務官の制服が粒子となって消えていき、一糸纏わ

ぬ、見事なプロポーションが束縛から解放された。光の粒子は再びアンダースーツとなり、ジャケットとなり、マントとなる。

バリアジャケットを纏い終えた。黒を基調としたジャケットスーツに、白いマントが対照的である。

フェイトは愛用のインテリジェントデバイスであるバルデイツシュを携えながら、ティアナの車と併走して飛行していた。

『フェイトさん、あまり高く飛びすぎないように気をつけてください。航空局の認可取っていませんから』

通信用のホログラムディスプレイからティアナの警告が発せられる。

「はい、ありがとうございます」

フェイトはスピードを上げて、前方の車に追いついた。脇から運転席を覗き込む。被疑者は必死の形相で車を運転している。

フェイトはサイドウィンドウをノックした。

ノックに気が付いた運転手が啞然とした顔をフェイトに向けた。車はさらに速度を上げて、フェイトを振り切ろうとするが、空戦魔導師相手に車で逃走しようとするのが大きな間違いである。

彼女は難なく車のトランクに着地した。今度は左右に蛇行し始めて、フェイトを振り落

とそうとする。

『直ちに停止してください』

警告のホログラムディスプレイを表示させても、止まる気配はない。

このまま進むとジャンクシャンがある。そこまで行くと、車を停止させるのは厄介だ。フェイトはバルディッシュをハーケンフォームに変形させて先頭に廻りこみ、フロントガラスに光の刃を突き刺した。

「や、止めてくれ！」

彼は情けない悲鳴を上げる。フェイトは何も言わないままに、プラズマランサーを大量に生成した。

タイヤとアスファルトとの摩擦音が大きく響く。車は黒々としたタイヤ痕をハイウェイに残しようやく停止した。

彼女は光弾を消す代わりにバルディッシュを被疑者に向けた。

「さあ、どこなの？」

「さ、サニーフィールドだよ。サニーフィールドに二人を埋めるように命令した！」

「サニーフィールド？」

「そ、そうだよ！ スノートン行政区にある、田舎町だ」

「わかった。ありがとう」

彼女は満足げに頷くと、被疑者をバインドと呼ばれる拘束魔法で拘束した。

それと同時にティアナが運転する車が到着した。

「午前八時一七分、被疑者を確保」

フェイトは事務的に告げて顔を上げた。クラナガン中心に聳え立つ地上本部ビルのみラーガラスが、真夏の陽光を乱反射していた。

一面、灰色であった。

その無機質な色は微弱の濃淡の変化を以て、山々を塗りつぶしている。

木々はほとんど生えておらず、生えていたとしても奇妙にねじ曲がった、明らかに奇形の木である。生命の気配というのはほとんどない。

「不毛の荒野とはこのことを言うのでしょうか」

（不毛の荒野か……）

フェイトは頭の中で、運手席に坐っているティアナの発言を反芻させた。

クラナガンから百キロメートル離れたところに、このような土地があるとは聞いたことがなかった。

サニーフィールド郡はスノートン行政区に位置する田舎町である。二本の州道が合流している交通の要衝であるが、産業らしい産業といえばクラナガン魔導工業の事業所がある程度か。

何の変哲のない名前。一度、聞いてしまえば、もう忘れてしまっても構わない。

工業的な装飾を取り込んでいることで知られる近代ミッドチルダ様式で、切妻屋根を持つ住宅が多く建ち並ぶ様子は、保守的な雰囲気装っている。

だが、いったん訪れてみれば、誰もがこの街の奇妙さに呆気に囚われるだろう。街の西部の丘陵地帯に広がる、この広大な荒野だ。麓までは普通の森なのであるが、中腹より上は鉱毒に冒された山のような様相を呈しており、灰色の地肌を晒しているのだ。

フェイトは、市街地の端で車をいったん停めた。

「ここで間違いないよね」

「ええ、そうです」

フェイト達は車から降りた。午後の苛烈な陽光が頭上から降り注いでいる。まさにサニーフィールドと言わんばかりの土地だ。

冷房が効いた車内を出ると、すぐに額から汗が落ちる。時々、吹いてくる風がフェイトのその艶やかな金髪と、ティアナの明るい橙色の長髪を軽く揺らした。内陸の風は湿気を含まず、からりとしている。

フェイトも思わず執務官の制服の襟を引っ張って、さらに風を送り込んだ。いくら夏場の薄い生地とはいえ、この時季に黒い服は辛いものがある。

「指示役の供述は、いまのところ正確です」

「凶器も確かに見つかったている。でも、実行役を確保しないことにはね」

裏切りをしたとされる二人の構成員は、掟に背いたということで制裁という名目で殺害されて、このサニーフィールドに遺棄されたというのである。

フェイト達は山へ続く道を見た。地図によれば、西部の丘陵地帯へ通ずる道は一本しかない。その先には、生命の気配が見られない不毛の荒野が広がっているのである。

デスクで椅子を温めることなく、常に現場に出ていることが多い二人は、今回ばかりは部下の捜査官を派遣させたかっと思っただ。

フェイトとティアナとは、互いに見合せて軽く頷いた。行こうかと言葉に示すことなく二人は進み始める。

道はあるにあったが、舗装もされていない。

平地の部分は普通の森であり、生命の気配は感じられる。

おやとフェイトは思った。少女が立っている。銀髪で白く透き通った肌の少女だ。年はヴィヴィオより高めの十四歳だろうか。ブラウスにスカートという出で立ちは、気品が溢れるお嬢様という感じである。



二人の気配に気がついたのか、その少女はそつと視線を二人に向けた。フェイトは思わずどきりとした仕草を見せる。少女の紅い瞳に、隠しようがない戸惑いが込められている。フェイトはそつと息を呑みながらも彼女に近づいた。

「こんにちは」

少女はフェイトの挨拶にしばし沈黙を守った。

「……こんにちは。管理局の人ですか？」

「ええ、そうです。管理局のフェイトと言います」

「何をしにきたのですか？」

発せられた言葉は明らかに険とした調子だった。

「管理局の仕事ですが、詳細は言えませんので」

「……そう、どこに行くのでしょうか？」

「この奥のほうに」

少女はあからさまに嫌な顔を見せる。まるで自分の家に土足で入り込まれたかのように、無遠慮な友人の振る舞いに迷惑したかのような顔でもあった。

流石のフェイトもそつと口角をきつくした。

「これ以上は行かないでください」

「——どうして？」

「ここは大事な場所です。あなた達のような、部外者が入っては行けない場所です」

もう敵意を隠そうとしない声音だった。はつきりとした非難を込められた言葉だ。フェイトは物憂げな調子で、彼女を再びつま先から頭のとっぺんまで瞥見した。

白く透き通った肌に銀髪だが、あどけなさが残る顔を見ると「蠱惑的」もしくは「魅力的」といった言葉がよく似合うが、悪意が微かに含まれた視線がその全てを台無しにしていた。

(さて、どうしたものか……)

フェイトは内心首を傾げた。管理局の局員の権限で、自分らの主張を押し通すことは可能だ。もちろん、十代半ばの少女といえども局員に危害を加えようとしたら、フェイトは彼女を拘束する権利を持つ。

だが、職業柄、フェイトもこのような拒絶的あるいは攻撃的な態度を示す子供を何人も見てきたので、威圧的に出るといふ安易な態度を取りたくはなかった。

「大事な場所。それは、あなた、えっと、名前を聞いていなかったね」

「エリカ・クライバーです」

「そう、ここは、クライバーさんの大事な場所なんです」

「エリカで構いません」

フェイトは一瞬片眉を吊り上げた。背後に控えているティアナは珍しいという感じで、

フェイトを見た。

「ああ、ごめんなさい。」

「そう、大事な場所ですから、早くお引き取りを」

「どうして大事な場所なのか教えてくれますか？」

「あそこには、綺麗な色があります」

「綺麗な色？」

灰色の大地が綺麗なのだろうか？ フェイトは意図を掴みかねた。感じ方は人それぞれかも知れないが、あれを綺麗というのは相当特殊な感性であると言える。

おうむ返しの返答に、彼女はようやく機嫌の良い表情を少しだけ見せた。

「とっても綺麗な色でして、虹色のような綺麗な色が見えます。もう、どんなものよりも綺麗な色なのです。しかし、入ってはいけません。入ると、色が襲ってきます」

色が襲うという言葉の意味が、フェイトにはわからなかった。隣のティアナは完全にこの娘は狂っているのではないかという態度である。

「——エリカ！」

後ろのほうから、大人の女性の声があると、エリカは露骨に嫌そうな顔を見せる。フェイトとティアナはゆっくりと振り返ると、落ち着いた気品の女性が近寄ってきた。使用人のような服装をしている。短めの銀髪が特徴的だった。

「まだ、ここに居たのですか。——あら」

彼女は管理局の制服を纏った二人を見て困惑の表情を浮かべた。

「管理局の方が、こういったところに来られるとは珍しいですね」

「ええ、事件の捜査です」

「どういった事件でしょうか？」

「それはまだ機密です」

「そうですか——」

使用人らしき女性の表情が強張った。

「済みません、エリカが何か迷惑を掛けてなかったでしょうか？」

「いいえ、何も。少し、娘さんとお話していただけですよ」

「ああ、それなら良かった」

彼女は安心したような表情を見せた。

「それでは、私らは失礼します。どうか、お気をつけください」

「はい、ありがとうございます」

二人が去るのを待って、フェイトとティアナとは再び進み始めた。

山道自体は何ら変哲もない。普段からは人は来ないのか、落ち葉が堆積しているところも多い。木々の梢は、行く手を阻むかのごとく覆い被さるようにして伸びている。

不意に森が開けて、すり鉢のような地形が眼前に現れた。そのすり鉢地形は廻りと比べて、数メートルほど低くなっている。

その巨大な窪地に灰色の地面が広がっており、そのまま稜線まで続いている。間近で見ると、その異常さが明らかにわかる。

それは不毛と称するほかはない。わずかに草木があるのはましなほうで、生えているとしても、明らかに奇怪にねじれ曲がった木々が点在しているだけであった。

草も何かの病気にかかっているかのごとく、灰色にお情けに緑を混ぜたような色である。気味が悪いです。早く探して戻りましょう」

「そうだね」

底に降りた。空気が淀みきっており、息を吸うたびに瘴気が肺に侵入してくるようであった。

その窪地の奥に洞窟の入口がある。虚無のような黒い入口が鯨のようにぼっかりと口を開けている。フェイトとティアナはそこで躊躇いがちに顔を見合わせた。

「実行犯が立ち入った洞窟はあそこでしたね」

洞窟の入口には結界が張られていた。それなりの練度がある魔導師でないと張れないような術式だ。さらに破ったりした場合、警告が出るような術式も組み合わさっている。

「洞窟信仰の類いで、ここまでしているのは初めて見ましたよ」

「入っちゃいけないというのも頷ける」

「地元出身はまずここに近づかないでしょうし、神罰をも恐れぬ人間ならできる芸当ですね」

二人の死体を遺棄したという、逃亡中の実行犯はこの町の出身である。この町出身でありながら、ここに遺棄をするのだから、地獄行きは確実だろう。

「実行役はこれを破ったのでしょうか？」

「彼くらいなら、この警告の術式を無効化して、こっそり侵入して、後で元通りにするとすることもできるね」

非合法組織に所属する魔導師は結界破りの類いに精通するか、狙撃魔法の類いに精通することが多い。

「破るか」

これくらいなら同じ術式での構築はできる。フェイトは躊躇いがちにバルディッシュを取り出して、ザンバーフォームで空を薙ぎいだ。光の壁が一瞬現れたかと思うと、それはガラス窓が割れるように崩れた。

「サーチャー」

次にフェイトは探索用の光球を生成して、その洞窟に放り込んだ。サーチャーはすぐに闇に食われてしまい見えなくなる。

「さて、どれくらい時間が掛かるかな？」

疑問を口にしたが、すぐに反応が見つかった。

『人の反応を感じました』とバルディッシュ。

「ヴァイタル反応は？」

『ありません』

彼女らは再び顔を見合わせた。ティアナの顔に微かな恐怖が現れている。顔には「先輩なんですから、お先にどうぞ」とはつきりと書かれている。フェイトはそつと息を呑んで、足を踏み入れた。

洞窟の内部はひどく蒸し暑く少し歩くだけで玉のような汗が吹き出すほどだ。

(気持ち悪い……)

既に下着まで汗でびっしょりだ。だが、その汗にはこの空間に対する緊張によるものが少なからず混じっている。洞窟は一本道で、照らされる壁面もやはり例外なく灰色に染め上げられていた。

道は徐々に彎曲わんきよくしており、進むにつれて振り払いのような闇が彼女らを纏った。

「そろそろだね」

人が居たとされるのはこの辺りだ、最奥と入口の中間地点にあたる。

フェイトは、サーチライトを強くしたが、それらしきものは見えなかった。

「おかしい、居ない」

「場所、間違えていませんか——」

ティアナが無理矢理に言葉を呑み込んだ。

「どうしたの？」

「あ、足元です」

「えっ」

ティアナの指摘に信ぜられないような顔をして、フェイトは自分の足元に視線を落とし、

フェイトは喉が潰されたかのごとく言葉を失った。

死体があり、それは確かに人であった。眠ったかのように目を閉じているが、ぴくりとも動かない。

顔付きから、確に行方不明になった構成員であることに間違いはない。しかし、何より奇妙なことは、その死体はもう頭の前からつま先まで灰色になっていた。

管理局本局は各世界に跨がる犯罪の捜査を司る部局である。その建物はどこの世界にも



属さないことを示すために、アーコロジーとして次元航行空間上に構築されている。

そのアーコロジーに存在する次元航行部のセクションに、フェイト達は戻っていた。

発見から一夜が明けても、フェイトは終らぬ事後処理に追われている。そのさなかにティアナが困った顔で報告してきた。

「もう一人は、局員？」

「ええ、身分証明書がありました。名前は、ジョージ・ペイリン二尉ですが、ただ、四十年以上も前の人物です」

「四十年前か……」

フェイトは呻くように言った。

死体は直ちに収納され、管理局本局に運び込まれた。洞窟で発見された死体は、確かに殺害された構成員の一人であった。さらに少し奥に下ったところに、もう一人の構成員の遺体と完全に白骨化した遺体とが発見されたのだ。白骨化遺体の周りに遺留品はあり、その所持品から局員であると断定されたのだ。

ティアナはホログラムディスプレイに、そのジョージ・ペイリンの顔を表示した。黒髪で生真面目そうな面立ちである。

「その局員は、突然、行方不明になったきりだそうですね」

「それで何十年ぶりに発見されたというわけね」

フェイトとティアナは押し黙った。ただでさえ、構成員の遺体が灰色となって発見されたことが謎なのに、これ以上謎が増えてほしくない。

「それで、彼はいつたい、どういった理由であそこに居たんだろうね」

「今回と同じように、事件に巻き込まれて人目のつかない場所だから運び込まれたとかじゃないでしょうか」

「なるほどね、あの様子だと、何十年も人が入った形跡はないからね。そういうた遺棄の場所としては合格だろうけどね」

「おそらく、今回の事件がなければ、ずっと発見されなかったと思います」

「四十年ぶりの帰還か。家族への引き渡しはいつになるの？」

「今日か明日かになりそうです」

フェイトは人知れず溜息をついた。当時、その局員にも家族が居たということだ。突如として帰ってこなくなり、数十年の時を経て、このような形で対面というのはどういった気分だろう。

「遺留品の引き渡しも、それに併せて？」

「はい、おそらくは——」

ちょうど通信が入った。

「次元航行部のティアナです。ああ、今からですか。はい、大丈夫ですよ」

「ユーノから？」

「はい、今から無限書庫に来てほしいと」

「どうにもわからないよ」

無限書庫の司書長ユーノ・スクライアはお手上げだと言わんばかりな表情を見せた。目にくまができて、どこか頬がこけている。特徴的な金髪はぼさぼさになっっている。

司書長であるが、その真似できない調査能力と、卓見に富んでいることから不可解なことがあるところやって調査に呼ばれるのだ。

また、徹夜したな。フェイトは呆れた顔を見せた。しかし、これがユーノのいつもの姿だ。徹夜続きで寿命を縮めようとしても、今更フェイトが指摘できることではない。

「はい、コーヒーです」

淹れ立てのコーヒーをヴィヴィオが持ってきた。コーヒーカップを置く仕草は彼女本来の活発さを感じさせながらも丁寧さが同居している。その長い蜂蜜色の長髪もかすかに揺れた。

「ありがとう、ヴィヴィオ」

フェイトは仕事の表情を引っ込めて、ヴィヴィオに母親の笑顔を見せた。彼女はフェイ

トの養子だ。もっと正確に言うと、フェイトは後見人という扱いであるが、ヴィヴィオはフェイトをもう一人の母親として慕っている。

彼女は読書好きで、放課後には無限書庫の臨時司書という立場でこの大書庫に出入りしているのである。

ヴィヴィオはぺこりと頭を下げて、司書室から出ていった。彼女が出て行くのを確認してから、ユーノはおもむろに口を開いた。

「それで、とにかく異常だった」

丸眼鏡の向こうで、疲れた目が鈍く光った。

「その、死体はもう別物の何かに変質していた。分光分析をかけたけれども、未知の分析結果を示したよ。後、あらゆる薬品にも反応はしなかったよ。塩化水素酸、硫化水素酸、どれにも全く反応を見せない」

面白いという表現するのがユーノらしい。

フェイトと、ティアナはユーノが続ける言葉はもう想像がついていた。

「ロストログアの一種だ。おそらくは物質浸食型の厄介なタイプだよ。周囲の物質を変質させて広がっていくものかな」

「あの土地一帯が浸食されているということ？」

「そこまでは断定できないけど、もっとちゃんとした調査が必要だ」

「なるほどね」

「僕は、もう一度死体を確認しに行くけど、どうだ？」

「私ももう一回確認しておくよ」

フェイトは、温くなったコーヒーを飲み干した。

安置室がある区画は巨大アークロジィの下層に位置していた。これより下層部は機械室や発電室といった区画となる。

直通エレベーターでこの階層まで降りた。心なしかひんやりとする区画で、フェイトはそっと身を震わせた。

広大な管理局本局でも、一番人気のない場所であり、遺留品保管庫といった関連区画もあるのだ。

「やはり、疑問なのが、どうして一人が灰色になっていて、残りの一人が通常通りなのかだよ」

ユーノの学者然とした解説はまだ続いていた。二人としてももう慣れたものであるから、半分聞き流しながら進んでいく。

電子錠を操作して、ロックが外れる音が響く。重苦しい扉がゆっくりと開いた。システ

ムで遠隔管理されて、普段は誰も居ない。開けると冷え切った空気が流れ込んでくる。何度も入る度にフェイトは身震いするのであった。

ここに納められた遺体は三体だけだった。

壁に巨大な抽斗がいくつも並んでいるが、それら一つ一つに遺体が収まるのである。

何番だったか、と思いつながら彼女は視線を左右に動かして、フェイトは首を傾げた。

何かがおかしい。違和感がある。そうだ、何か溶けた跡のようでもあった。

灰色になった遺体が納められている五十一番は明らかにおかしい状態であった。そこに納められているはずの特殊金属容器がなかったのだ。何かに溶かされたかのように全てがなくなっている。

「嘘でしょう」

ティアナの声が、冷え切った空間に漂った。

それと同時に三人は身構えた。

何かが居る。この空間内に何かが居ることは確かだった。彼女らの本能が警告を告げて、程なくしてフェイトとティアナのデバイスが論理的な警報を異口同音に告げた。

部屋の隅にそれは居た。人の形をしているが、それは灰色であった。しかし、ガスなのか、換気の風で揺らいでおり、不定形である。その未知なるものは時折、灰色のような光を放ったかと思えば、見えなくなることもあった。

二人は反射的にバリアジャケットを纏って少しづつ後退をした。

フェイトが光球を牽制に放った隙に、ユーノが扉を開けて、フェイトとティアナもそれに続く。三人は出るや否や、その扉に電子施錠を掛けた。

「何なの、今の……」

「わからないよ」

フェイトとティアナが恐怖に震えた声で独語した。今まで経験したことがない恐怖であった。

「魔法生命体?……」

ユーノも上擦った声で応じた。

二人は顔を見合わせて、安置室の扉を見た。フェイトはそつと息を呑んだ。閉めきったがこれで良かったのだろうか。

このまま溶接をして、この安置室に誰も出入りできないようにしたいと思った。

フェイト達は、何も行動しないで居ると、

「魔力行使の反応がありましたか、どうかしましたか」

近くの警備担当がやってきて訊いた。三人はどう答えるべきか皆目見当がつかない。

「ですから、どうしたんです? 何があったんです?」

警備担当の局員は苛立ちの様子を見せた。執務官なのに状況報告も満足にできないのか

と言わんばかりの態度である。

「中に何か居る」とフェイト。

「何かとは？」

「それは——おそらく、魔力生命体、いや、ロストロギアかな」

その回答に警備担当は信ぜられないような顔をフェイトに向けた。何を馬鹿げたことを言っているんだと顔に書かれている。

「こんな場所？」

彼は扉の電子端末に手を掛けたところをフェイトが制止する。

「とにかく、中に入らないほうがいい」

「しかしですね、中に入らないと様子が確認できないでしょう」

彼は扉に手を掛けて、ロックを解錠しようとする。

「ま、待って——」

もう一度制止しようとしたが、もう遅かった。解錠とともにわずかに扉が開けられた。扉の隙間から、その灰色のものは滲み出るように廊下に姿を現して、瞬く間に警備担当に覆いかぶさった。

彼は全身の痛覚に刺激を受けたかのような悲鳴を上げて、口から泡を吹いて倒れ伏した。同僚の突然の変化であるにも拘らず、フェイト達は後ずさって、距離を取った。



奇妙な色彩のそれが、警備担当からゆっくりと離れて、再びフェイトのほうに向かってくる。

「来るな！」

フェイトが牽制のフォトンランサーを放つ。奇妙な色彩に当たると、光弾が爆ぜて白煙と音とで廊下を満たした。

実体はあるらしい。そして、通常の攻撃も効くらしい。それは怯んだのか正反対の方向に去っていく。

三人は呆然としてその光景を眺めていたが、ようやく我に返った。

「テイ、ティアナは、その人の救護を！ 私はあれを追う」

「僕は——」

「ユーノはティアナの援護に入って」

「わ、わかった」

程なくして、局内に耳障りな警報が鳴り始める。局舎内での大規模な魔力反応の行使に自動警報が作動したのだ。耳障りで、内臓に響く重低音にフェイトはそっと口角をきつくる。

「どうしたの？」

遺留品保管庫のほうから、思いも寄らぬ人物がやってきた。

「ほ、本部長、これは」

現在、フェイト達が臨時所属している対策本部長サラ・ルフトである。老いてしまい髪もすつかりと白くなっているが、上品な気品の持ち主の女性であった。

「ここは危険ですので、すぐに避難を」

「あら、そんなに危険かしら？」

彼女はデバイスを取り出した。確かに魔導師ランクは平均より上だが、今回は相手が相手だ。

「相手は、不可視のような存在です。時々、灰色のような形で姿を現す、奇妙な生命体が今この局内に居ます」

本部長はその一言に、肝を抜かれたような顔をした。

(皆、反応は同じだね)

実際、この目で見えた自分もあの存在を理解できない。ましてや、伝聞だけではなおさらのことだろう。

「——わ、わかったわ。ハラオウンさんは？」

「私は、逃げ出したのを追ってきます」

フェイトは三人を残して駆け出した。微弱ながら魔力反応があれから出ている。それを追っていけばどうにかなるはずだ。

追っているうちに、無限書庫の近くまで来た。それらしきものはどこに行ったのか。見失ったと言えば見失ったようだ。

「バルディツシユ、もう一回、反応を探してくれる？」

『はい、探していますが、微弱なために今は探知ができません』

「お願い」

フェイトは辺りを見廻した。目にもろくに見えない。魔力反応による探知もしづらい。そして、明らかに攻撃的な性質の何か。

「色が襲うか……」

あの少女の言葉を思い出してフェイトは身震いした。背後で櫛製の扉がゆっくりと開けられる音がして、彼女はやや驚いた様子で振り向いた。

「ね、ねえ、フェイトママ、何があったの？」

娘の不安に震えた声が聞こえてきた。フェイトは凜然とした顔を引っ込めて、いつもの優しさに溢れる顔で、

「ちょっとした騒ぎだよ。他に人は居ないの？」

「司書さんがもう一人居る」

「そうなんだ。でも、大丈夫。私の言う通り、中に居れば安全だから」

「……わかった、気をつけてね」

ヴィヴィオはゆっくりと扉を閉ざした。

一応、境界を張っておくべきかと思つたが、頭を振つた。今までの行動から見る限り、扉を開けなければ安全だ。つまり、中に籠城していれば、当座の安全は保障される。

その謎の生命体はどう来るのだろうか？

フェイトはバルディッシュを握り直した。手が汗ばんでいる。得体の知れないものと戦う恐怖だった。

(怖がっている?……)

彼女は自嘲気味に笑みを浮かべた。

彼女はそのまま身構えていたが、反応が来る気配がない。

どこかに隠れたのだろうか。フェイトはそつと上に視線を向けると、ちょうど換気口に目がついた。

「まさか」

絶望に彩られ始めた呟きを聞く者は自分だけであつた。先程も、それはわずかな隙間から滲み出てきた。拳一個分程度のそれから外に出たのである。

相手は不定形の存在だ。厄介な害虫が、極わずかな隙間から侵入してくるように、それもちよつとした隙間さえあれば、もう問題ないのである。

フェイトはもう一度左右を見廻して、無限書庫の中に入った。

「ヴィヴィオ、どこに居るの!？」

「ここだよ!」

司書長室から娘の声が聞こえたことを確認すると、フェイトはすぐにそこに向かった。健在な姿を確認すると、彼女は少し表情を緩める。

司書室にはヴィヴィオと、もう一人の司書の女性が不安そうに坐っている。

そのとき、背後の景色が微かに揺らいだ。

「ヴィヴィオ、こっち!」

悲鳴に近い声をあげる。ヴィヴィオと女性司書が当惑の表情を見せたが、後ろから何か覆い被さろうとしているのを察知すると、その当惑は瞬く間に絶望に転じた。

ヴィヴィオも魔法運用はできる。反射的に防御魔法を行使しようとしたが、作られた光の薄壁はたやすくその灰色に食われた。

それは、ヴィヴィオと女性司書を一挙に呑み込むような動きを見せた。女性司書は狂乱したかのように、手近なガラスコップを灰色に向かって投げつけた。当たった灰色の部分が大きく揺れ動き、女性から離れていく。

しかし、残りがヴィヴィオの体に巻き付いた。巨大な蛇が彼女の身体に巻き付いているようにも見える。フェイトはザンバーを振るうと、灰色のそれは二つに分離した。

もう半分はそのまま床に落ちて、逃げるように換気口に入り込んだ。

(逃がした!……)

しかし、それを追っている暇はない。もう半分は彼女の体に着いたままだ。本人もそれを手で必死に払おうとしている。

そのときだ。それはヴィヴィオの体の中に入った。

乾いた大地が水滴を貪欲に吸収するかのごとく、灰色のそれは彼女が纏っている学院の制服を通して、その華奢な体に消えたのだ。

フェイトは啞然とした顔つきを見せた。当のヴィヴィオはきよとんとした素振りである。そして、操り糸が切れた傀儡のように倒れた。

「ヴィヴィオ!」

フェイトはヴィヴオを抱きかかえて揺さぶった。息はあるが、彼女はぴくりとも動かない。

「ヴィヴィオ! 目を開けて!」

フェイトの悲痛な叫び声が、無限書庫内に響いた。

「はい、アヘッド、アヘッド」